

# ディアスポラ、記憶の隘路を辿る旅

Garrett Hongo の *Volcano: A Memoir of Hawai'i*

伊 鹿 倉 誠

History is a matter of perspective. There are at least as many tales as there are participants. Some do the telling, some the listening; some hold center stage, some are walk-ons or stage-hands behind the wings or, like the *kurokata* in Kabuki or No, black-hooded figures without faces, whom no one is to notice or acknowledge.

— David Mura, *Where the Body Meets Memory*

Hawai'i 島東部の港町 Hilo から46km余り、Kīlauea 噴火口 (1250m) と活火山 Mauna Loa (4169m) に挟まれて Volcano は在る。この山間の食料雑貨店奥の台所で1951年5月30日に Garrett Kaoru Hongo は呱呱やまあいの声を上げた。出生証明書の生地欄には“29 Miles, Volcano Highway” (309) と記載されたが、店舗兼家屋を巡る遺産相続争いに巻き込まれ生後8ヵ月で北西400kmに浮かぶ O'ahu 島 North Shore へ、6歳になると安定した職を得た家長の後を追って妻子は本土 Los Angeles へ移り住む。後年、Volcano Art Center から詩の朗読会に招聘されたホンゴーは「自分が生まれ付いた崇高な大きな塊」(“a big chunk of the sublime I'd been born to” 4) に実に30年振りに里帰りする。その後の断続的な生地往還の顛末を、謎めいた家族史、紆余曲折した詩人半生<sup>1</sup>、そして故郷ハワイ島に自生する植物や火山活動に関する洞察を織り込みながら回想したのが、*Volcano: A Memoir of Hawai'i* (1995年初版刊) である。

1982年当時、作者に出生地の僅かな記憶もあろうはずがない。ただ、赤子を水遊びさせる水着姿の母や、Hongo Store の店先で満面の笑みを浮かべる父に肩車された乳飲み子のモノクロ写真だけが残る。ヒロからヴォルケーノまで登攀する伯父の車の助手席で甥は「自身の生に関する書物の中に足を踏み入れる」(“entering a book about my own life” 6) 感覚に襲われる。海拔760mにある Glenwood では気温も下がって多雨林が広がり始め、1220mの頂上付近まで喬木、灌木、蔓草や苔の三層の草木から成る原生林が繰り返し姿を現す。ハワイの大自然が織り成す「通過儀礼」(8) に従い詩人は生家に立ち寄ってみる。

すると子供の頃両親から聴いた断片的なストーリィが記憶の深淵から蘇る——喉頭癌で余命一年と宣告された祖父 Torau Hongo が20年以上営む食料雑貨店を、復員兵援護法の恩典でオアフ島 Honolulu 市内の夜学に通う長男（父）に継がせると言い出したのが1949年のこと、翌年4月父は母と結婚し帰郷するも、跡取り息子を待ち切れず祖父は Eveline という名の在庫管理係と再縁していた。孫が生まれる数ヵ月前にトラウは他界し、継母の奸計から相続分が少ない長男は揉め事を避けハワイ島を後にする——。

\*

キラウエア火口を見下ろすハワイ火山国立公園で縦4.8km横3.2kmの溶岩平原を前に詩人は、一木一草もない痩せ地に「ほとんど純粋な無」（“an almost pure nothingness” 22）を認め「他の何よりも先に自分にとって土着風景の自然図案に暗喩を見出せ」（25 26）というアイルランド詩人 W. B. Yeats (1865 1939) の言葉を噛み締める。そして生まれ落ちた大地の一部として、強制移住（1942年2月から1945年1月）という政府公認の辱めを受けた日系アメリカ人の歴史の一端として<sup>2</sup>、これまでよりより良い自分となりたいと痛切に思う（26）。それはハワイ島という土地を知り、この南洋に浮かぶ火山島に自分の名を結び付け「島との接触から一種の聖典、起源に関する書物を生み落とす」（“to deliver out of the contact a kind of sacred book - a book of origins” 27）という願いである。

アジア系アメリカ作家の多くが、非白人によって営まれる多種多様な生の特質の価値を減じる周縁化や、自己のストーリィが消去される脅威に晒されている、と詩人は現状分析する。さすれば、アジア系ディアスポラは、白いアメリカというマスターナラティブの巻末に置かれる付録に過ぎぬのだろうか<sup>3</sup>。作者は、植民地化されてきた民族自我を解き放つ筋道を「文化的自己嫌悪の逆撥手順」と呼び、脱植民地化後に産み出される新たなストーリィの必然を説く（“Culture Wars” 13 14, 25）。また、17 18世紀に流行した組曲パルティータに喩えて非常に緊密で複雑なリズムを備える「緻密な散文の書」を執筆したと語るが（Colley 56）、この発言には単純に見えて多様なリズムと複雑な感情を伴う内省的な伝達媒体が言葉であるという言語観が認められる。以上のような観点から小論では、詩人が綴る多層世界を、父親の報われぬ生涯（系図学）、熱帯多雨林に描き込められたハワイ島日系移民史（植物学）、そして溶岩流による詩人の再生（火山学）に分けて論じる。そして最後に日系アメリカ詩人に

よる 生地帰還 の意味を考察したい。

## 1. 父の肖像写真<sup>ポर्टレート</sup>

日系三世の父<sup>4</sup> Albert Kazuyoshi Hongo はロサンゼルスのみすぼらしい病院でフィリピン人看護師に見取られ他界する。ヘリコプター制御盤の修理工は非組合員で古参のため、早期退職をしきりに迫る会社側と揉めていた。怒り心頭に発しハワイ訛りの英語 (“*Hawaiian pidgin English*” 29) で退職勧奨を撥ね付けるが、心労から自宅玄関で昏倒し一週間後の急逝である。埋葬地は生まれ故郷のオアフ島ではなく、ロサンゼルス南の太平洋に面した San Pedro 地区に決まる (Colley 48)。年三十路に余る息子は、この非命の死を契機に子供の頃から詳細を知らされぬ一族の過去を知りたい思いが芽生える。すなわち作者にとって生地往還の旅は父や祖父の謎に包まれたハワイ島日系人が残した足跡を辿ることを意味する<sup>5</sup>。散逸する家族史の断片を掻き集めて血縁や文化面で先代との結び付きを回復する試みは、マイノリティ作家によく見受けられる。とりわけ、強制収容を記憶する日系人作家は、歴史健忘症と模範少数民族<sup>モデルマイノリティ</sup>の枷<sup>かせ</sup>から脱して民族文化主体を取り戻そうと刻苦する。この意味において郷愁とは、特定の場所や過去を探求する原動力と成り得る。

原因は判然としない長期に亘る意気消沈に襲われる詩人は、恒常的に多忙を極めながら不満で苛立ってしまう。何をやろうとも漠とした不幸せから気を散らせない鬱状態は、思えば先父に特徴的な常態であった。その症状は、高学歴の息子のように「知的思索や学術的な仕事で仮面を被ることもままならぬ、絶え間ない鬱ぎ込み」 (“perpetual melancholy unmasked by intellectual thoughtfulness or academic projects” 238) である。伸び放題の芝生や潰れた羽虫で斑点だらけの自家用車と共に夢遊病者のように昼まで寝間着姿の父が目に見えぬ。ホンゴーストアを追われた直後マウイ島で就労したハイウェイ建設工事や海兵隊基地のジェット燃料補給やトラック荷の積み込み作業は「身体を罰する労働」以外の何ものでもない。本土移住後は電子機器の組み立てラインの修理工やヘリコプターの電子回路や遠隔測定システムを検査する安定職に就くも、それは完全分業化による「自尊心を傷付ける」「単に退屈なだけの」(238) 仕事であった。幼年期の高熱が原因で聴力障害を抱えていた父は、耳栓をせずに道路建設やジェット機の騒音の中で働き続けたため、相手の声が明瞭に聞き取れず本土での社交生活に支障を来す。名ばかりの昇進を数回経験した後10年に一度の昇

給を待つだけで職場の片隅で黙して労務に服するしかない (239)。やがて、昼間勤務に付き物の人間関係に耐えきれない父は、「落胆の昼日中」から「静かで空虚な深夜」に退行する。夜勤に出掛ける父は、夏はプロ野球記録<sup>データ</sup>の整理、秋になると競馬予想に日中の余暇を費やす。かくして、孤独な日系三世労働者は苦痛ばかりの現実に背を向けてしまう (240)。

全米最大規模の劇場 Shrine Auditorium の近隣に暮らす子供の頃、ロサンジェルスが目抜き通りをドライブした雨降る夜を息子は忘れない。父も母も「公共の場でのぎこちなさ」(“public stiffness”) と「控え目な言外の恥辱と所属できない痛み」(“a mild, unstated shame and the pain of not belonging” 242) を子供に気取られてしまう。白人客ばかりのソーダショップでピジン英語と本土英語を交ぜて話す息子に渋面を作る母——「本土にいるんだから英語を話すんだよ」。ハワイ島に生まれた少年は、言語において自己矯正することで新たな生活、新たな文化を獲得する (“I corrected myself, acquiring another life, another culture” 243) ことを居た<sup>たま</sup>堪れぬ記憶と共に学ぶ。

埃っばい古本屋でロシア神秘思想家 Georgei Gurdjieff (?1874 1949) の著作を拾い読みする父は、この地で自ら適切と思う場所を見付けられるのか(“the question of his proper place on the earth” 246) と思い煩う様子であった。

But it was his incarnate soul that he thought upon, the wheel of a postcolonial's life sent to the industrial capital to find work. He was literate but dispossessed of a culture. Though he made a living, there was no center to this Mainland life that he could feel a part of. (246)

アメリカ西海岸の大都会に移り住む父は、一種の文化喪失に陥り、日常生活は営むことができても自らがその一部と感じられぬ中心を欠くポストコロニアルな人間に成り果てる。聴覚障害から親しい友人を作ることも叶わずハワイで暮らす姉妹と連絡を取ることもなく、実母や継母のことを生前一切語ることもなかった日系ディアスポラの心中は察するに忍びない。

詩の朗読会に招聘されて3年後、妻と生後9ヵ月の息子を連れ二度目に帰郷する詩人は、今や客の姿もない寂れたホンゴーストアの前を行き来するだけで生家に足を踏み入れる気になれない。仕方なくHaunani Roadの交差点にある別の商店に妻と立ち寄ってみる。正月用に料理した煮付け、仏壇に供える茶、独立記念日のピクニックで齧り付いた煎餅、叔父が借金弁済に持ち込んだ牛肉

缶詰の山など、連想で広がる日本食材（黄粉、パン粉、米、豆腐、小豆、筍）で溢れる商品棚はまるで「生地に関する記憶の貯蔵庫」（44）のようだ。この「押し寄せる連想の宇宙」（46）は“Nostalgic Catalogue”（第二詩集 *The River of Heaven* 所収）で用いられたイマジズム特有な技法である（Sato 59 60）。“*Cheerios, Raisins, and Papayas*”（128 30）というハワイの子供時代の食生活を回想する短い記述では、山小屋で味噌汁を作る詩人が、鯉節の匂いが台所一杯に立ち籠める中で鼻歌混じりにネギを刻む祖父を思い出す。その場面を「文化と記憶の路傍」（“a wayside of culture and memory” 129）と呼び、干葡萄入りシリアルや果物を平らげる幼い息子 Alex を対置して食文化の変遷が目録のように浮き彫りになる。

伯母 Charlotte によれば、熊本の没落士族の末裔である本郷虎禹<sup>ほんごうとらう</sup>は、20世紀初頭にハワイに移住する。それは、契約奴隷制と同等であるという理由から民間主導の契約移民が禁止され日米移民協定が締結された頃である（濱野 22）。実兄 Torakiyo（虎清）は、ハワイ島ヒロで保険業を手始めに教会設立など現地日系人社会で着々と地位と名声を築く。この質実な兄とは対照的に、酒好きで花札賭博や艶事に憂き身をやつす弟は、やがてオアフ島ホノルル近郊で茶屋（teahouse）を買収する。長女（伯母）が生まれるも、妻を離縁して店の芸妓 Yukiko と再婚する。息子ふたりをもうけた頃から金遣いや馴染客のことで夫婦仲がおかしくなる。肌寒い雨の夜、風邪で寝込む2歳の長男（父）たちを継子の長姉に託し、実母は砂糖きび農場の現場監督 Katayama と駆け落ちする――。芸事見習いに横浜行きの貨客船に乗せられてから人間の欲望に翻弄され続けた祖母の生き方は、一面識もない孫には到底理解できない（58）。しかも伯母の口から、末弟 Bobby 出産後間もなく死んだと教えられていた祖母が、日



父アルバート（左，1944年）Colley 50

本舞踊のお師匠さんとしてホノルルで暮らすと告げられる。一方、茶屋を廃業した祖父は和服の訪問販売を再開するが、やがて大恐慌（1929年10月）になり息子ふたりは通い女中のバアチャン（*ba-chan*）に預け、末娘の Lily と長女を連れハワイ島に帰郷する。このとき兄トラキヨの薦めと金銭の援助もあって食料雑貨店をヴォルケーノで開業する。靴磨きで家計を助けながらホノルルの高校に通う長男の父、ハワイ島から送金が途絶えても養育するバアチャンとおじさん、 仮親 ふたりを入隊前まだ10代の父が Koko 岬海岸で1944年頃に撮した記念写真を詩人は記憶する。新兵訓練を受けヨーロッパ戦線の激戦地で戦功を挙げた日系422部隊に所属する父は、戦後オアフ島に帰還しハワイ大学実験室で仕事を夜学に通いながら母との結婚を待つばかりであったという。突如「大人になった息子」が凱旋して「鼻高々で吹聴して歩いた」（68）祖父、翌春ハワイ島に帰省する長男は「店の仕事を懸命に手伝うことで、父さんに認めて欲しかったのよ」と伯母は語る。

身内に纏わる波瀾万丈の問わず語りを聴き終える甥は、なんと捩じ曲がった家系に自分は生まれ付いたことかと嘆息する。

I was not who I had thought myself to be, the nothing sprung from a nothing without history. I'd been born to an amazingly twisted line, to a dancer and a libertine, equally prodigal, and to a filial but orphaned father, each of us a descendant of shame, inheritors of no tangible patrimony. (69-70, 下線引用者)

身売りされた娘であった芸妓の祖母と女好きで道楽者の祖父、祖父母に一度ならず捨てられた父と同じく、息子（作者）も家督を継げぬ家系の末裔である。結局の所、歴史のない虚無から生じる人間などあり得ない、「土地と自分を繋いでいる絆は、この引き裂かれた棘棘とげとげしいストーリー以外にない」（“no tie but this ripped and jagged story bound me to the place” 70）と詩人は自嘲する。

## 2. 熱帯多雨林の世界：hāpu‘u と ‘ōhi‘a

ここでは、植物学的な記述から次第にハワイ島日系移民史を繙く手法を考察する。第5章“House of Ferns/House of Fire”で「ハブウ」と題された9頁弱の文章には、ハワイ島ヴォルケーノ近辺の植物生態から民間伝承、大規模農園プランテーション経済、そして日系移民史が自生植物の暗喩を通して巧みに描かれる。



二回目の帰郷でホノルル在住の弁護士から借りた小さな山小屋から一步出ると其処は見馴れぬ熱帯植物の宝庫である。ハプウと呼ばれるイルカ大の葉を持つ提灯羊歯ちようちんしだは、地表に生えた小さな苗から約5-8mの堂々とした樹木に成長する。地中根を持たぬハプウは文字通り根無草であり、詩人を含めた日系ディアスポラの暗喩であろう (Davis 53)。雨水を吸収する敷物繊維のような樹幹や編み合わさる空中根を伸ばすハプウは、熱帯多雨林に生長する巨大草であり、その繊細で脆く地表と接する佇まいは「天使の足許」と表現される。野豚が樹芯にある澱粉質を好むが、ハプウの芯の塩漬けが戦前には砂糖きび農場の日系移民に珍重された (72-73)。食物連鎖の如く作者はヴォルケーノ村民に伝承されるハプウの戦い (“*Hāpu‘u Wars*”) を紹介する。事の発端は、地所の境界に日系人電気技師が植えていたハプウの立木を白人隣家が無断で切り倒し樹芯を酢漬けにしたこと。手塩に掛け育てた樹齢12-15年のハプウを切り倒された被害者は「長々と取り留めのない感傷や優しさや詩心へ訴え」 (“a long, rambling appeal to sentiment, tenderness, and poetic understanding” 75) 直談判で臨むが、加害者側に少しも斟酌されない。日本語とハワイ語と片言の英語による執拗な抗議に業を煮やす白人隣人は、遂にハプウを掘り起こしてしまう――。

日本的感性に対する白人住民の無頓着は「アメリカの経済原則 - 自然界は農作物である」 (“American principle: *The natural world is a crop*” 76) という看板ひとたびに一度収斂される。ハプウの芯を洗濯糊に加工しようと思いつく20世紀初頭の起業家、19世紀に枕や敷物の詰め物用として乱採取された茎表面に生える綿毛状角質層 (*pulu*)、そしてハプウ農園の廃墟が残る島は “the unsettled bones of Hawaiian Fordism” (77) に喩えられ、アメリカ産業文明が手厳しく批判される。1867年から1881年の15年間で1800トン以上のプルウが本土輸出され、総量は羊歯で覆われた緑の洋島が消失したのと同じだという。だが、こうした米  
国型大量生産と大量消費の犠牲となるハワイ島の自然は、ハプウという正に搾取対象であった「永遠不滅の木」 (“*an immortal tree*” 77) によって再生の道を歩き始める。樹冠の重みに耐えられなくなる樹齢30-40年のハプウは、倒れた樹幹から新芽を出して天蓋を作る。すなわちハプウは倒壊してなお万物の頼もしい始まりの一部を成す樹木なのだ。ハワイ島の熱帯多雨林という煉獄の浄罪作用に思いを巡らす詩人は、翻って自己の一徹短慮を戒める。

*Hāpu‘u* shook me out of my own mind, its pettinesses, its inglorious

memories of quotidian and notions of identity and the personal, and joined me to something else, not quite beyond time but anciently a part of it a *via negativa* I glimpsed in the presence of the most chthonic, intimate piece of botanical creation I've ever seen. (79)

日常生活に関する些事を超越したハワイ島で再生を繰り返し生き延びる自生植物から、暗く原始的で神秘的ながら親近感を覚える ウィーア・ネガティブ 打ち消し法 を作者は垣間見たのであろう。

自然界に潜在する再生力は、「多様な形を有する鉄の心臓」(“heart of iron with many forms”) という学名 *Metrosideros polymorpha* を持つ灌木オヒア (*'ohi'a*) の記述にも認められる。数千年前に外洋を浮流したり、ハリケーンの旋風に煽られハワイ島に運ばれた低木は、中浜万次郎 (1827-98) ら鎖国時代の漂流民の暗喩であろうか。この灌木性の樹木は、近接する遺伝学的に他花受精が容易な亜種の雑種群を形成しながらハワイ島の海岸線から山麓まで広く適応拡散するという。

Not unlike the California woodland oak tree, the Hawaiian *'ohi'a* exists in a kind of hybrid swarm of closely related and genetically compatible subspecies, capable of radiating into many adaptive forms, occupying multiple botanical niches in the forest at altitudes from seacoast to subalpine. (87)

1959年キラウエア火山が大噴火を起こし、貿易風に乗ってハワイ島南西部の多雨林に火山灰が降り積もる。1790年以來の大降灰で多雨林がほとんど消失する。土地を埋没させ、原生林を焼き払い、道路を塞ぎ、集落を呑み込み続ける溶岩流にも負けず、噴石だらけの痩せ地に根付く外来樹木がオヒアである (86)。海拔900mから1400mに位置するヴォルケーノ村では、オヒアの立木が5m前後まで生長し群生する。カヌーの舷縁、ウクレレの材料、薪や床材と用途多様であり、赤い花と葉はクリスマスリースに利用される (88)。

さて、元ハワイ大学教授 (植物学) が語るオヒアの生態は「永遠不滅の木」(77) と呼ばれるハプウ同様に自然界の循環経路を直截に伝える。植物単作が原因で下草や苗木への陽光を閉ざすオヒアは、数十年で成木のみとなると、マウナロア火山の斜面全域に及ぶ数平方マイルの規模で突然立ち枯れる。

This is because mature *'ohi'a* takes over the biological zone and completely fills it up all by itself, creating, for all intents and purposes, a botanical



monoculture, choking off light to other plants and even new seedlings of 'ōhi'a so that, for scores of years, nothing but the mature 'ōhi'a can grow there. (89)

こうしてモザイク状に消滅するオヒアの成木は、新しい苗木が日差しを受け生長するように枯死するという。詩人はオヒアの風変わりな生態に「最初は不慮の厄災と見えたものが新生を可能にする」(“What might at first look like a disaster would thus enable renewal” 90) 自然の理法を見て取る。

ハワイ語で「鼠の足」を意味する *wāwae-'iole* は高さ約90cmの羊歯植物である。垂下する大釘状の球花とエメラルドグリーンของヒマラヤ杉のような樹皮から、多雨林に浮かぶ珊瑚礁が刈り込まれた小振りのクリスマスツリー、或いは「鍵盤に向かう緑色の指先に見える小葉、八分音符の灰色の雨滴と葉先」(92) に喩えられる。ワウエイオレは、無性成木と孢子から配偶体を生む。新世代である胎芽が 子供 ではなく 大人 を産み落とす多年生植物は「人間の姿に似せた、成熟に関する従来の語りの奇妙な反転」(“a strange reversal of the conventional, anthropomorphic narratives of maturity” 93) を証明する。さらに、詩人はより詳しく知りたいハワイ島原産の生姜 (*kāhili*) やクロミキ苺 ('*akala*) や蕁麻 (*māmaki*) を手帳に書き留める。そして、手塗り挿絵付き植物図鑑で調べるといふ「自分が本当に欲するもの、もっと本来の根源に関わる対象の代替物」(94) に暫時専心する。しかし当然のことながら、ハワイ島多雨林の野生植物にいくら精通してみたところで、所詮一知半解の徒に過ぎない。

### 3. 溶岩流と再生と

山小屋で暮らし始めて三週目の夜半、14km余り離れたキラウエアが噴火する。動揺して跳び起きる詩人夫妻は、ハワイ火山観測所に通報するが、所員は一向に慌てた口振りもなく見物スポットを教えてくれる。今回は1983年の大噴火から19回目の爆発になるという。海拔300mの集落 Kea'au で車を止め砂糖きび畑の彼方を見詰めていると、小さな直円錐から羽毛状の白い蒸気を照らすバラ色をした光の軸が見え、天変地異の恐怖と歓喜を同時体験する (106)。1987年4月、州道130号線を越え海に流出した溶岩流を見に行くと、Kapa'ahu 海岸は焼け焦げた酸味と重たい蒸気で覆われている。400mほど駆け下り水際で冷えて固まる溶岩を観察する。滑らかで表面が波打ち凝結しやすい、摂氏1100度近い

液状溶岩 *pahoehoe* が火山性ガスを放出し尽くすと結晶化し粗いガラス質 *'a'ā* に変成する。ハワイ大学の地質学者によれば、過去千年で数百回溶岩が流出したことが放射線炭素測定で可能らしい。このように悠遠の昔からアア溶岩は製造と解体による衝突をゆっくりと繰り返してきた (230)。

さて、直径10cm前後から7.5m以上の導管を流れ噴出するパホエホエ溶岩に呑み込まれ焦げた車が散在する民家は、廃品置場に変貌している。焼き尽くされ鉄屑と化したトラックはタール状溜め池に嵌り込み身動きが取れない氷河期のマンモスのようだ。作者は、二戸建て廃屋の屋根より高く迫り上がる溶岩に初めて足を踏み入れた際の眩暈にも似た鮮烈な倒錯感を記す。

I was spellbound out there, suddenly in a world strangified by this rare phenomenon a kind of silvery ocean on whose waters I could walk. I felt wrapped inside of a brittle shroud of birthing. The heat did not matter, nor did the faint charge of acidic air annoying my breathing. The sting in my eyes seemed part of the awareness, the joy of feeling something was new. (112)

まだ完全に冷め切らぬ流出溶岩に跳び乗る詩人は、眼前に広がる銀色の海の上を歩いて行けそうな不思議な感覚に襲われる。それは「出産直前の碎けやすい経帷子の内側に包まれている気分」である。そして辺り一面に発散される熱気や硫黄臭による眼の痛みは「新しき何かを感じる歓喜」と解釈される。冷却して固い表皮の内部は煮え立つ溶岩流である。その場所を歩く作者は、固体と液体の差違は僅かな時の浮層でしかないと思い、数百メートルほど溶岩の海原を歩く自分の体内に「オレンジ色に明滅する矜持の如き湧昇」(“an upwelling like an orange glimmer of pride” 113 14) を感じ取る。

溶岩道を歩こうと出掛けた詩人が、Holei Paliの巨大な断崖に河床を見付けたことがあった。硝子化噴出物で出来た3mほどの土手に囲まれた、アア溶岩からなる1.5mから9m幅の河床を歩くうちに詩人は、灼熱の溶岩流に焼き尽くされる自分の姿を想像する。それは「何の次元も良心の欠けらも無く私を薙ぎ倒して通り過ぎる千古の無」(“a primitive nothingness slashing its way past me without dimensions or conscience” 116)の一瞬であろう。マウナロア火山から海に向かう地割地帯の険しい河底では、皮膜状の溶岩によって次第に天井が張られ円柱状の溶岩トンネル (lava tube) が形成される。大きいクラスだと直径がニューヨークの地下鉄に匹敵する (118)。*'Alae* 楕状地の盛り上がり



「ハワイ火山国立公園サーストン溶岩トンネル」(1993年) Cook 22

た場所で天井に穴の空いた溶岩トンネルの中を覗く機会を得た詩人には、導管内壁の色彩が、地球の下膊<sup>かほく</sup>と広大な手首に開いた血管の脂肪質繊維のように見える(119)。そしてハワイ火山観測所の科学者と一緒にトンネル上の天井穴から内部を流れる赤く焼け付く溶岩を凝視していると「天空光」(skylight)を眺める倒錯感に襲われる。終わりのないサウナのような「緩やかな苦痛」を耐え忍び「対流する小細胞」(“a little cell of convection”)に放り込まれ「美しきもの」を前に立ち尽くす感覚である。作者はこの溶岩トンネルを「陸地にある可視の脈拍」(“the visible pulse of the land” 120)と呼び、自ら「生命に関わる赤い運河を滑走する赤子」(“like a baby sliding along its mortal red canal” 120)と称する。

米地質調査所(USGS)の地質学者の案内で詩人は、Kūpaianahaの盾状地にトレッキングに出掛けたことがあった。航空写真では巨大な腎臓のように見えるクパイアナハ溶岩湖は、見る者に懺悔したい気持ちを抱かせる。沸騰する竪穴を覗き込むと、開鑿された巨大な穴の深淵から囁き声が聞こえてくる。陸続と産出される「原始物質から成る湖沼」の「純粋な創造の岸边に」(“on the shore of pure creation” 285)に佇む詩人は、「やがて訪れる子の父となる親密さ」(“its intimacy, a kind of fathering to come”)で以て間断なく自己増殖す

る地神<sup>ちじん</sup>と肩を並べたいと心から願う (286)。

半月が懸かる真夏の夜、キラウエア火口に近い炯炯<sup>けいけい</sup>たる漆黒のカルデラを歩く。紫色と灰色から成る高さ2mの唇状溶岩をよじ登り、月光に照らされた乳房を想像する。そして、巨大な唇の中で胎児のように身体を丸め母なる大地に身を預ける (328)<sup>6</sup>。この幻想的な場面で「時間を逆戻りしてある場所に戻った感覚」(20)を詩人に抱かせたハワイ島で「島との接触から一種の聖典、起源に関する書物を産み落とす」(27)という悲願が象徴的に成就する。

ホンゴーストア裏の地中に溶岩トンネルがキラウエア溶岩流の支流で形成されたとき詩人は耳にする。土地勘のある混血隣人の案内で、幅6m奥行5m弱の洞窟口に佇む詩人には、最初のうち白色騒音<sup>ホワイトノイズ</sup>しか聞こえない。暫く息を殺していると、トンネルを吹き抜ける風の音が死者の口に霊媒<sup>シャーマン</sup>が唄い掛ける「死後の生の話声」に聞こえる。語り手は「こりや *kapu* だ。これ以上進んじやならん」と洞窟を後にする (124)。元来カプウとは、統治者 (*ali'i*) と平民 (*maka'ainana*) を峻別する、13世紀以降の王朝時代に制定された古い禁令であった。「それはカプウだ」と言えば決して犯してはならぬ禁忌、すなわち、貴賤上下や現世と来世の境界線を意味する (125)。多雨林の縁まで戻ったとき、この土地の霊力を現在も信じている自分にマウイ島で暮らしていた子供の頃の帰属感が甦る (“a sense of belonging to the land known to me at five... a belief in the power of the land” 124)。この挿話は、父の葬儀に参列した従兄弟から20ドル紙幣を押し付けられた嫌な思い出を想起させる。数年後ハワイ島で老日本語教師の告別式が行われたとき、臆面もなく無礼な手振りが「敬意と結束を示し負担を僅かばかり共有する」(289) 礼法に基づくこと知る。短慮を恥じ入る日系四世詩人は、霊前に香料を供える残存慣習を「ハワイに里帰りして真の生命<sup>いのち</sup>と豊かな表現力を回復する、微かに周縁化された反復行為」(289 90)と理解する。

#### 4. 永遠の生地 帰還：Mendocino Rose

父が亡くなって数カ月後、詩人は身重の妻 Cynthia の故郷 Oregon 州 Eugene へロサンジェルスから車で向かう。夏休みに突入した6月、ゴールデンゲート橋を渡り州道1号線をひたすら北上する作者は、S字カーブが多い急勾配の車道や太平洋から吹き寄せる濃霧、そして海沿いに切り立つ崖を間近にして懐郷の情に堪えない (319 20)。カーステレオからは、転地療養先の San Francisco

で客死した David Kalākaua 王 (1836-91) を悼んで Kapiolani 女王が詠んだ “Ipo Lei Manu” が流れている。Gabby Pahinui (1921-80) の母音強めの心地よい歌声は、カヌーパドルの律動やフラダンスの柔らかい手の動きや峡谷の斜面に降る驟雨を彷彿させる。息子には「故郷を遠く離れた男の死」 (“a man’s death far from his home”) を悼む歌が「愛する者も傍らになく、帰還できぬまま息絶えた」 (“Death without return. And no beloved around you” 322) 父への葬送歌に聞こえる。そしてオヒアの木に絡み付いて咲き揃う花輪レイのような蔓科のバラ *Rosa californica* を路辺に何度も見掛ける (318-19)。海沿いの町に立ち寄る詩人は、草藪にバラを見付け、繊細な小花を優しく諸手もろてで包む。そして、先父が求め続けながら一度も得られなかった、土地との開かれた心からの結び付き (“a feeling of connection not so much to any particular place... but the world of *feeling* and openness to it” 322) に思いを馳せる —。

ハワイ島は、太平洋プレートの真ん中からマントル上昇流で出現した。太平洋プレートとアメリカ大陸の緩慢な衝突で隆起したのが、詩人が立つ California 州最西端の Mendocino 岬である。それならば、アメリカ西海岸とハワイ島を地底で支える広大無辺の殻板プレートの縁ヘリに立つ自分は「死ぬことから生まれる美の生誕の証人」 (“witness to the birth of beauty that is born from dying”) ではないかと作家は考える。その上で悠久の年月を経た地殻変動で大洋を隔て遠く離れたふたつの地点を「自身の内部にある精神の再生に向けた心象や象徴」 (“images and symbols for the regeneration of spirit within myself” 324) で直感的に捕らえてみる —。ハワイ島の山間の村に早春の気が満ちる頃、詩人はキラウエア火山のクレーター近くの円環道路沿いにメンドシノ岬付近で手に取ったバラの花を目にする。その柔らかい花卉と芳香を「人間が手で触れることなど到底叶わぬ、力強さと秩序と権限授与の感覚」 (325-26) と呼ぶ。その思考を超越した生命創造と深く関わる原初状態は、いわば臍へその緒で繋がる胎児が浮かべる愛くるしい笑顔 (“a beam of love from the eternal to the nothing we are” 326) に等しい。

数年後、魚類野生動物庁 (FWS) の生物学者と共に一週間の予定でハワイ島へ再び帰還したことを報告する、半頁ほどの段落で *Volcano* はあっさり閉じる。ヒロ空港に降り立ち「官能的な出生地特有の島風に吹かれ」高積雲に消え入るマウナロア火山の紫色に染まる緩斜面を目にする詩人は、胸が締め付けられ感謝の嗚咽が洩れる。クレタ島から脱出を試み海に墜ちたイカロスに倣い、涙し

て跪きたい衝動に駆られる。その瞬間、ハワイ島生まれの日系アメリカ人である喜びを感受する。

I stepped off the plane, and when the full blast of the island's erotic and natal wind hit me, when I caught sight of Mauna Loa's purple slopes disappearing into clouds, a sob of gratitude filled my chest and choked my throat. I wept and felt like falling to my knees in daedal mimicry of my soul's Icarus. [...] What radiates as knowledge from that time is that there is a beauty in belonging to this earth and its past, even one locked in mystery and prohibition, unstoried, that exceeds all the passion you can claim for it. (339)

当該作品の末尾で“*I wish you knowing. I wish you a land*” (339) と読者に語り掛けることで、ヴォルケーノとは特定の場所を意味しないことが示唆される。詩人は郷愁と追憶で溢れる生地で暮らすことを最終的に選択しない。過去に生きる必要はないと考えるからだ。だから何処にも所属せず、過去に束縛されぬことなくヴォルケーノに棲むことを決断する。

I don't have to live in the past, as the past was lived. [...] I'm not locked in to the opinion of the community here, not enclosed and defined by its gossip, not subject to all of its mores. Yet, full of nostalgia and retrospect, I catch myself wanting to be. [...] Like a *haole*, I am free to speak whatever's on my mind no one can beat me, fire me, or cast me out with ridicule and shunning. I belong nowhere, I tell myself. And, *I belong in Volcano*. (332)

作者はヴォルケーノを地図上に存在しない「精神的ホーム」(Davis 49) と位置付ける。風景写真集 *Hot Spots* に寄稿した序文の中で、生まれた村の意味を特定の場所への帰属感にあると断った後、その霊域に近い home 感覚は、親密な暖かさや認知受諾や血縁に等しいと説明する (“Ministry” 9)。

ハワイ島で産声を上げた詩人は、ただ村の一部であることに満足せず、共同体の外に身を置き一路邁進すると心に誓う (331)。ヴォルケーノ村で生まれた次男坊 Hudson は、出生証明書やホンゴ一家の記憶されるべき新たな一頁として綴じ込まれる。父のように帰らぬ旅の人でも数十年振りに帰郷した自分でも構わない、土地に生まれた物語は、世代を経て語り継がれて 永遠の生地 となる。生まれ故郷に一時逗留するでも家名を継ぐでもいい、「物事の一部を成している安堵」 (“Being secure as part of things”) が人を絶えず幸福な気持ち



にする (300)。この抜きがたい帰属願望があればこそ、ディアスポラの息子は「アメリカの中で巨大な一枚岩の如き人種的他者に取り囲まれた、感受性と特質から成る世界」(“a world of feeling and specificities among the vast and monolithic Other of race in America” 227) を守り抜けるのであろう<sup>7</sup>。

## 注

1 アジア系アメリカ人作家15名による回想録 *Under Western Eyes* (1995) を編むホンゴーは、執筆者のうち詩人が半数近く占める理由を、詩作において重要な歴史や感情や知性の前景化 (foregrounding) が充分ではないと感じるアジア系アメリカ人は、回顧録や自伝エッセイで心理的欠損を補償すると指摘する (“Culture Wars” 26)。寄稿者には1984-85年の日本滞在記 *Turning Japanese* (1991) の日系三世詩人 David Mura (b. 1952) も含まれる。

2 ハワイは真珠湾攻撃後の日本軍上陸地点と予測されながら、多くの日本人や日系人は強制収容所に送られていない。その理由は、彼ら多数派を職場から排除すれば全島が機能麻痺に陥ると判断されたからである (濱野 26)。

3 中国系アメリカ人小説家 Maxine Hong Kingston (b. 1940) は、アメリカという国の地中深くにアジア系の根を張ることができれば、想像力と歴史、東洋と西洋の精神統合は不可能ではないと主張する (“Letter” 26)。

4 母方の祖父 Kubota は合衆国領ハワイ生まれでアメリカ市民ながら広島で学校教育を受け帰島した所謂 帰米 *Kibei* であり、作者ホンゴーは日系四世にあたる。

5 母の死を契機に沖繩生まれの祖父や植民地時代の台湾で暮らす母が残した足跡を辿る、与那原恵 (b. 1958) の『美麗島まで』(2002) を彷彿させる。

6 ホンゴーは、*Volcano* の着想をキングストンの長篇小説 *China Men* (1980) に得ている (“Culture Wars” 17-18)。ハワイ諸島経由でカリフォルニアに渡った祖父 Ah Goong は、大陸横断鉄道建設のために絶壁を竹籠で降り発破を仕掛ける仕事に就く。峡谷の美しさに耐えきれず “I am fucking the world” (133) と声に出しながら自慰行為に及ぶ。

7 日系アメリカ人は、アメリカ文化の中で周縁化された民族文化を担う所謂 「ハイフン付きアメリカ人」と呼ばれる。合衆国における多文化教育の観点から、アメリカ文化に特徴的な個人主義を基礎とする、自己が中心に位置する回顧録や自叙伝は、多言語及び多文化を体験する作者を迎えて 「アメリカ文化の万華鏡の本質」 を映す優れた教材と評価される (Calvillo 52-53)。

## 参考文献

- Calvillo, Caroline M. “Memoir and Autobiography: Pathways to Examining the Multicultural Self.” *Multicultural Education* 11.1 (Fall 2003): 51-54.
- Colley, Sharon E. “An Interview with Garrett Hongo.” *Forkroads: A Journal of Ethnic-American Literature* 4 (Summer 1996): 47-63.
- Cook, Diane and Len Jenschel. *Hot Spots: America's Volcanic Landscape*. Introd. Garrett Hongo. New York: Little, Brown, 1996.

- Davis, Rocio G. "'I Wish You a Land': Hawai'i Short Story Cycles and *aloha 'aina*." *Journal of American Studies* 35.1 (2001): 47-64.
- Hongo, Garrett. "Culture Wars in Asian America." *Under Western Eyes: Personal Essays from Asian America*. Ed. and introd. Garrett Hongo. New York: Anchor/Doubleday, 1995. 1-33.
- \_\_\_\_\_. "Ministry: Homage to Kilauea." *Hot Spots: America's Volcanic Landscape*. 9-13.
- \_\_\_\_\_. *The River of Heaven*. New York: Knopf, 1988.
- \_\_\_\_\_. *Volcano: A Memoir of Hawai'i*. New York: Knopf, 1995.
- Jarman, Mark. "The Volcano Inside." *The Southern Review* 32.2 (Spring 1996): 337-43.
- Kingston, Maxine Hong. *China Men*. New York: Knopf, 1980.
- \_\_\_\_\_. "A Letter to Garrett Hongo upon the Publication of *The Open Boat*." *Amerasia Journal* 20.3 (1994): 25-26.
- Lee, A. Robert. "Hawaiian *Walden*? Memorialization in Garrett Hongo's *Volcano*." *ALA Journal* 6 (2000): 65-78.
- Mura, David. "Asia and Japanese Americans in the Postwar Era: The White Gaze and the Silenced Sexual Subject." *American Literary History* 17.3 (Fall 2005): 604-20.
- \_\_\_\_\_. *Turning Japanese: Memoirs of a Sansei*. New York: Atlantic Monthly, 1991.
- \_\_\_\_\_. *Where the Body Meets Memory: An Odyssey of Race, Sexuality & Identity*. New York: Anchor/Doubleday, 1996.
- Sato, Gayle K. "Cultural Recuperation in Garrett Hongo's *The River of Heaven*." *Studies in American Literature* 37 (Feb. 2001): 57-74.
- 池澤夏樹「オヒアの花」『ハワイ紀行』東京：新潮社，1996年，37-64頁。
- 濱野成生「日系アメリカ人の歴史 - ハワイへの移民 - 」アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学 - 記憶と創造 - 』大阪：大阪教育図書，2001年，17-30頁。
- 与那原恵『美麗島まで』東京：文藝春秋，2002年。